

報告

保護者支援・教育研究所の活動

福井 謙一郎・本村 弥寿子・荒木 正平
山本 尚史・倉成 央・浦川 末子・滝川 由香里

The Activity of “Supporting Parents and Educational Center” (Report)

Ken'ichiro FUKUI・Yukari TAKIGAWA・Yasuko MOTOMURA

Shouhei ARAKI・Hisashi YAMAMOTO・Hiroshi KURANARI・Sueko URAKAWA

キーワード：保護者支援、保護者教育、子育て不安、親育ち講座、地域包括連携

1. 問題と目的

保護者支援・教育研究所と『親育ち講座』

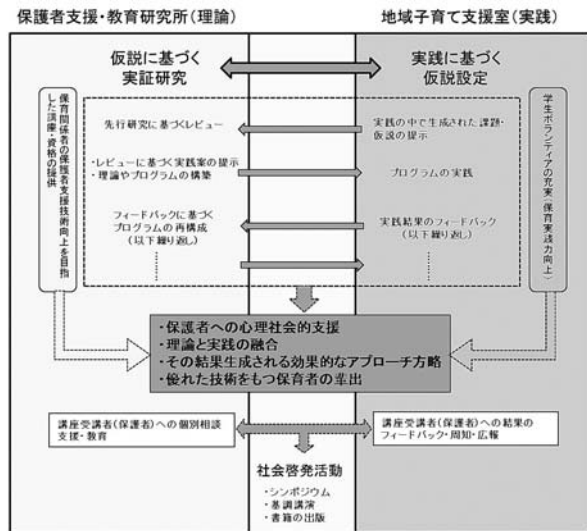


図1 保護者支援・教育研究所のイメージ

保護者支援・教育研究所の概要 保護者支援・教育研究所（以下、本研究所）は、従来おこなわれてきた保護者支援の実践的側面に加え、その裏付けとなる理論的側面を充足させることにより、①「親自身の学びと子育て支援を充実」させ、同時に本学学生や保育関係者との連携により、②「保育関係者の保護者支援技術の向上」させ、それらが最終的に③「子どもの健やかな発達支援」につながることを目的としている。また、本研究所は、「教育」「心理」「医療」「福祉」の4側面から実

践・研究が進められるよう、それぞれの分野の専門性をもった研究所員を配置し、あらゆる側面から保護者をサポートできるような推進体制を構築した。

子どもの最善の利益をめざして 子どもの最善の利益を守るために必要なことは二つある。マズローの欲求階層説を参照すれば、一つは生理的欲求の充足、もう一つは安全・安心の欲求の充足(情緒の安定)である。これらの欲求充足のためには、子どもを養育する保護者への支援が求められるのである。特に、近年増加傾向にある保護者・養育者から子どもへの虐待は、上記二つの欲求充足を妨げるものであり、社会全体を通して取り組んでいかなければならない課題である。

一般的に、虐待予防のための取組は次の三種類が挙げられる。(i) 虐待を未然に防ぐ一次予防、(ii) 現在起こっている虐待を止める二次予防、そして (iii) 虐待経験者による虐待の連鎖を防ぐ三次予防である(森田、2006)。これらの虐待予防のうち最も重要視されるのは、(iv) 虐待を未然に防ぐ一次予防である。この点に関して渡邊(2011)は、社会的に虐待の一次予防が為されているにもかかわらず、虐待が減少しない理由として、虐待を行う「兆候のある個人(親)」ばかりに焦点が当てられ、「何の兆候もない個人(親)」

への調査がないがしろにされており、虐待リスクのない親への調査を進めることが必要であると指摘している。以上の点を踏まえながら、本研究所は以下の取り組みを行ってきた。

一時的予防としての『親育ち講座』 以上の実態を踏まえた上で、本研究所は南島原市と連携しながら、親の子育てへの理解を深めるための『親育ち講座』を実施した。本講座は、上述した「(i) 虐待を未然に防ぐ一次予防」の観点と、保護者に

子育ての正しい知識を教授するという観点から作成されており、なおかつ子どもがどのように成長発達していくのか、その具体的な段階について、専門的な知識を有しない保護者にもわかりやすく構成されたものである。

本報告では、この親育ち講座の概要と、実施後の保護者の反応を踏まえながら、今後の親育ち講座の方向性や方針について検討することを目的とする。

表1 親育ち講座のテーマと概要

回	講師	テーマ	概要
1	浦川 末子	子どものしあわせづくりのために	子どもの成長にとって重要なことを、生涯発達の視点と講師自身の教育活動の経験から伝達する。
2	福井謙一郎	愛着ってなあに？	子どもの対人関係の基盤となる愛着のシステムについて伝達する。
3	滝川由香里	おなかの中の赤ちゃん	胎児期の子どもの感覚や出産に関する様々な知識を伝達する。
4	滝川由香里	乳児との関わり	産まれたばかりの乳児とのかかわり方について、専門的な知識を踏まえ、解説する。
5	本村弥寿子	乳幼児期の教育	乳幼児期の教育やしつけのあり方について、乳児教育の観点から解説する。
6	本村弥寿子	一緒に遊びましょう	上記の幼児教育の観点をふまえ、子どもとの具体的な遊び方について伝達する。
7	福井謙一郎	愛着と友だちづくり	乳幼児期に構築された愛着が、どのように対人関係に影響を及ぼすか伝達する。
8	長尾久美子 荒木 正平	子ども・子育てを支える様々なしくみ	子育てを行う上で必要な専門機関ならびにその利用の方法について解説する。
9	倉成 央	親子のコミュニケーションについて	親子がコミュニケーションをとる上で重要なテクニックやあり方を、愛着理論を交えて伝達する。
10	倉成 央	親子のコミュニケーションについて	

2. 方 法

『親育ち講座』の概要

『親育ち講座』は、2015年7月から南島原市の協力を得て月一回ペースで実施された一講座45分の10回講座であり、一日あたり2回、全5日間の日程で実施された。全10回の講座の簡潔な内容は表1の通りである。

本研究所の研究員は、それぞれ『心理』『医療・保健』『教育』『福祉』を専門とする者で構成されており、なおかつ本講座では、それらの領域を子どもの発達過程に合わせて保護者に学習してもらうように配慮されている(表2)。つまり、子どもが誕生する前に身につけておくべき子育て観や子育ての理論(愛着理論)に始まり、胎児期から乳児期にかけて、保護者が子どもに対してどのよ

表2 親育ち講座の領域別分類

回	領 域
1	子育てへの態度と基礎理論(心理)
2	
3	乳児と保護者のかかわり(医療・保健)
4	
5	幼児と保護者のかかわり(教育)
6	
7	子どもの対人関係と活用できる社会資源(心理・福祉)
8	
9	親子のコミュニケーション(総論)
10	

うなアプローチをすればよいのかを学ぶ。その後は、子どもを受容することに重点を置いた心理学的視点から教育学的視点へとシフトし、子どもに『生きる力』を身につけさせるためにはどのよう

な教育的かかわりが必要なのか、また、子どもが成長する中で対人関係から習得していくことを知り、保護者がどうあればよいのかを系統的に理解していくのである。つまり本講座の第一の目的は、受講者（保護者）が、子育ての基礎的知識やかかわり方等を学ぶことにより、子育てに自信を持つことである。そして第二の目的は本講座を通して得た知識・技術を、子育てに取り組む地域住民に伝達できる力を養うこととしており、この目的は、地域の子育て支援ネットワークを広げることにつながっている。

調査対象

親育ち講座受講者23名（内回答者17名）

『親育ち講座』感想アンケートの調査内容と分析方法

本アンケートは全13項目から構成されており、

表3 感想アンケートの項目ごとの内容

項目数	調査内容
1	講座の内容の満足度について
2	講座の設定時間の満足度について
3	講師の説明がよく理解できた
4	子育て(サポートのため)の不安が減った
5	育児(保護者を支援すること)に対して自信がもてた
6	子育て(サポートする際)の見通しがついた
7	子育ての方法が(サポートするために)参考になった
8	子育てについての質問や相談が気軽にできた
9	育児(支援者としての)意欲が高まった
10	この講座は私の子育て(サポート)に必要な場と思う
11	子育て期(保護者支援)を自分なりに楽しんでいこうと思う
12	今後もこの講座に参加したいと思う
13	その他、この講座を受講されたご感想やご意見をお聞かせください。

Q1とQ2は「非常に満足」「満足」「あまり満足していない」「全く満足していない」の4件法を用いた。さらにQ3からQ12は「とてもそう思う」「少しそう思う」「あまりそう思わない」「全くそう思わない」の4件法で調査を実施した(表3)。そしてQ13については、自由記述形式の調査項目であるため、Q1からQ12のうち、どの調査項目に該当するかを研究員で分類した。

3. 結 果

表4 親育ち講座の感想アンケート結果

Q1からQ2の項目内容	非常に満足	満足	あまり満足していない	全く満足していない
講座の内容の満足度について	15(88%)	2(12%)	0	0
講座の設定時間の満足度について	12(71%)	5(29%)	0	0
Q3からQ12の項目内容	とてもそう思う	少しそう思う	あまりそう思わない	全くそう思わない
講師の説明がよく理解できた	15(94%)	1(6%)	0	0
子育て(サポートのため)の不安が減った	10(63%)	6(37%)	0	0
育児(保護者を支援すること)に対して自信がもてた	9(56%)	7(44%)	0	0
子育て(サポートする際)の見通しがついた	7(44%)	9(56%)	0	0
子育ての方法が(サポートするために)参考になった	12(75%)	4(25%)	0	0
子育てについての質問や相談が気軽にできた	5(31%)	9(56%)	2(13%)	0
育児(支援者としての)意欲が高まった	12(75%)	4(25%)	0	0
この講座は私の子育て(サポート)に必要な場と思う	13(81%)	3(19%)	0	0
子育て期(保護者支援)を自分なりに楽しんでいこうと思う	13(81%)	3(19%)	0	0
今後もこの講座に参加したいと思う	14(88%)	2(12%)	0	0
満足度平均%	71%	28%	1%	

表5 自由記述（Q13）の内容と調査項目ごとの分類

自由記述内容	調査項目ごとの分類
これからも、このような講座(子育て…)をどんどん増やしてほしい。このように土曜日だと、仕事も休みなので、また参加したいです。	Q1 Q2 Q12
今まで子育てしていてバタバタな日々で子どもをよく怒っていましたが、やはり1番はスキンシップ抱っここんな時でも抱っこをしていこうと気付かされました。貴重な時間に勉強できた事を今度の子育てに生かしていきたいです。ありがとうございました。	Q6 Q7 Q9
内容が奥深くともいい講座でした。親が変われば子も変わる!! 大切だと思いました。子供は自分の物ではない…楽しみながらの子育てを…と思いますが、難しいですね。でも頑張ろうという気持ちももらいました。	Q1 Q9
とても興味のある話を聞いて色々考えさせられました。	Q1
こういう講座に参加したいが託児がないとダメでした。あと昼開催。夜は参加しづらい。なので、参加しました。ありがとうございました。	Q1 Q2
タイプが「違う」ことで対応が変わるというのがとても参考になりました。子供や周りの人がどういうタイプなのかなど気にかけていきたいと思います。	Q3 Q7 Q9
できることなら、南島原市の子育て家庭すべての方々を受講させてあげたい位、本当に素晴らしいものでした。必修科目にしてほしいです。本当にありがとうございました!!	Q1 Q10 Q12
大変いい講座ですので、ぜひ、このような場を沢山つくっていただけたらと思います。また、沢山の方へ、この講座をお知らせして、もっと沢山の方が受けると、子育てのなやみがへったり、自信へつながると思います。全部の講座を受けてみたいです。	Q1 Q4 Q5 Q10 Q12
倉成先生のコミュニケーションをする上で6つのタイプを知っておく必要があるという内容は、とても有意義なものとなりました。いろいろな技術があり、その人を知り、理解する事が先決だなあと感じました。ありがとうございました。	Q1 Q3 Q7
今回の講座全体を通して、自分自身が子どもだった頃をふり返ることもあり、子育てや親育ちだけというのではない、様々なことを考えさせられました。自分自身にもっと自信を持って、子どもに接していこうと思います。ありがとうございました。	Q1 Q5

親育ち講座の感想アンケート結果（表4）

親育ち講座を受講した保護者はいずれの項目においても高い満足度を示している。特にQ3『講師の説明がよく理解できた』においては、「とてもそう思う」が94%と非常に高い数値の満足度を示している。また、Q12『今後もこの講座に参加したいと思う』の項目も88%と高い数値であり、Q1からQ2の『非常に満足』、『満足』Q3からQ12の『とてもそう思う』『少しそう思う』の数値を平均したところ、総合満足度の平均が99%に達しており、親育ち講座全体を通して非常に高い満足度の数値を示した。

一方で、Q8『子育てについての質問や相談が気軽にできた』の項目については、唯一「あまりそう思わない」に回答されており、調査項目全体と比較すると、満足度が高くないことが明らかとなった。

自由記述（Q13）の内容と調査項目ごとの分類（表5）

Q13の自由記述欄にも、回答者17名のうち10名から様々な意見が寄せられた。それらを調査項目

Q1からQ12のいずれに該当するか分類したところ、表5の結果となった。受講者のほとんどが講座の内容について非常に満足しており、特にQ7『子育ての方法が(サポートのために)参考になった』に該当する回答が非常に多く見られた。また、Q2『講座の時間設定の満足度について』の項目については、託児の有無や、講座が午前中に設定されていることへの意見が寄せられていた。

4. 考 察

『親育ち講座』の重要性（効果）と課題

以上の結果から、受講者の『親育ち講座』に対する満足度は非常に高いと考えられる。この満足度の高さの背景には、子育てに関する理論を前提知識のない保護者に理解できるようにした教育的工夫を行ったことと、講座内容に関して子育ての理論的背景のみならず、「子どもにどうかかわるか」といった実践的側面を重視したこと挙げられる。また、本講座が受講者の負担にならないためにと本研究と南島原市が考案した託児システムや時間帯の設定が受講者の満足度を高めたと考えられる。したがって、受講者に対するこれらの様々

な配慮・工夫が、受講者の育児に対する意欲を高め、育児に自信を持たせることにつながり、さらには本講座の必要性を印象付けたのではないかと考えられる。

一方、今回の調査結果から、本講座の課題も見えてきた。Q8『子育てについての質問や相談が気軽にできた』の項目について、満足度が決して高い数値でなかったということである。確かに「とてもそう思う」「少しそう思う」を総合すると、満足度としては87%と低くはないが、問題は「あまりそう思わない」と回答した受講者が13%存在したことである。このことは、受講者が個人的な子育ての悩みを相談したいという意思表示だと推測される。本講座においては、個人的な子育てに関する相談を受ける時間を30分ほど設けていたものの、受講者のニーズはそれを上回るのであろう。したがって、来年度実施の親育ち講座では、個人的な相談時間をより長く設定することを検討していかなければならない。

『親育ち講座』から『保護者支援士養成講座』へ (提案と課題)

上述したように、本講座は非常に有意義であり、かつ社会のニーズに対応したものであることが分かる。しかし、本講座自体は研究員の数やスケジュールの都合上、一年に一回しか実施することができず、子育て支援のネットワークを広げるためには、あまりにもペースが遅いと言えよう。

これらの課題を解決すべく、本研究所は、現在『保護者支援士養成講座』を計画している。この講座は子育てに悩む保護者をサポートする『保護者支援士』を養成するための講座で、子育て家庭の現状を深く理解し、寄り添いながら親を元気にできる専門職を育てるための新資格制度である。基本的には、①親力を育てる（知ることによって安心感を持つ）、②子育てを楽しむ親を育てる（地域と繋がる力）ことを目的としている。なお、この『保護者支援士養成講座』は既に各自治体ならびに幼稚園・保育協会にも広報を行っており、各機関から非常に高い期待を寄せられている資格制度である。この『保護者支援士』を養成し、社会に輩出

することで、子育て支援のネットワークがより広がりを見せていくと考えられる。

参考文献

- Bowlby, J. 愛着行動（母子関係の理論）新版 岩崎学術出版社 1991
- Bowlby, J. 分離不安（母子関係の理論） 岩崎学術出版社 1995
- Bowlby, J. 対象喪失（母子関係の理論） 岩崎学術出版社 1991
- 小野寺敦子 親と子の生涯発達心理学 勁草書房 2014
- 安藤智子、荒牧美佐子、岩藤裕美、丹羽さかの、砂上史子、堀越紀香、幼稚園児の母親の育児感情と抑うつ：子育て支援利用との関係 保育学研究46, 2, 2008
- 数井みゆき、遠藤利彦、アタッチメント—生涯にわたる絆—ミネルヴァ書房、2005.